

出エジプト記 15:22～27

「癒す約束」

2022年11月20日(主の日)

先週は、直前の箇所です。主なる神への初めての賛美を聞きました。救いは神の御業によることを受け入れ、また神はいつでも困難にあるわたしたちを救ってくださる、何よりも罪から救ってくださると、時空を超えて響く歌声によってその御名を賛美すべきこと、賛美する喜びを知りました。わたしたちが、教会でいつも思う存分賛美だけをして生きていければどんなに楽しいだろう、と思います。しかし、わたしたちは教会で礼拝するのは週に一度だけです。日曜日の礼拝から送り出されて、日常生活をしなければなりません。そこでは、ご飯を食べなくてはいけないし、食器を洗わなくてはいけない。仕事をして生活費を得なくてはならないし、子供の世話や将来の心配があり、病気であれば病院にいかなくてはならないのです。日曜日と特別なことがあった時以外に主のことを思い起こして祈ることがどれくらいあるでしょうか。祈り賛美するのは、多くても一日が終わった時、朝起きた時、食前感謝くらいではないでしょうか。神に仕え、神に賛美することだけで済むのは終わりの日が来て、神の御許におかれた時だけです。今は、わたしたちは日常生活を、人生を生きなくてはなりません。たしかにわたしたち自身は神の民とされ、恵みの中に生かされています。しかしそれと同時にわたしたちの日常生活、あるいは人生は時に神を見失う、神から離れる誘惑に満ちた荒れ野の中を旅するようなものでもあるのです。

エジプト軍の追手から救い出されたイスラエルの民はここから荒れ野の旅を始めることになりました。この短い文章による出来事の報告は、この後の荒れ野の旅の基本の形があらわれています。つまり、問題が生じ、民が不満をもらし、モーセがとりなし、神が救ってくださるのです。ワンパターンに思えるかもしれませんが、これと同じ形がこの後にも出てきます。そしてこのパターンは信仰者の生活の旅の形でもあります。問題が起こって困難に陥ると、私たちは不満を言い、あるいは助けを求めます。モーセのとりなしというのはわたしたちでいうならば、主イエスのとりなし、御言葉を聞く、ということです。そして神が救ってくださいます。さらにいうならば、わたしたちはそこで賛美をします。先週話したように、困難から救ってくださるのは神であり、わたしたちは感謝の応答、栄光を神にお返しして礼拝をします。さて、巻末の地図を見るとわかりますがシナイ半島は北からシュルの荒れ野、パランの荒れ野、シンの荒れ野と荒れ野ばかりでなりたっています。今、葦の海を出発したイスラエルの民はシュルの荒れ野に方向を定めています。その道すらも荒れ野であって、3日間水なしで旅をするはめになってしまいます。マラというおそらく小さなオアシスにつきましたが、ここに沸いていた水は苦くて飲めませんでした。現代風にいうとマグネシウムかなにかの苦い味のするミネラルが多すぎたのでしょう。民は不平を言います。「何を飲んだらいいのか」と。賛美の声はたった3日の喉の乾きによって神への不満にかわってしまいます。それを受けたモーセは主に向かって叫びます。あ

あなたはいつもともにいてくださるのではなかったのですか、と。そこで神はモーセの祈りに応え、一本の木を示され、モーセがそれを投げ込むと木によって水は苦味がとれて甘くなりました。そして、さらに荒れ野を進み、もっと大きなオアシス「エリム」につきましました。そこには12の泉があり、70本のナツメヤシが生えていました。水も食料も十分です。もちろんここが安住の地ではありませんが、しばらく留まって、鋭気を養うことができました。

この短い物語は、民の困難を助けるために、神が一本の木で水を甘くするという奇跡を起こされた、と単純に考えることはできません。水を濾過する木というものもあるそうで、ひょっとしたらそのような生活に根ざした事を奇跡かのように記してあるだけなのかもしれない。わたしたちは、人生において祈ったからといって超自然的な奇跡が起こって解決する、などということを期待することはできないのです。そうではありません。超自然的奇跡でなくても、神はわたしたち人間を困難から助けてくださる、ということに信じているのです。ちょっと考えてみればわかることですが、自分の問題の解決を神に祈る時、それが超自然的なできごとがおこることによってだ、というのなら、本当に信じて祈ることができるでしょうか。祈ったらこの腰痛が突然消えるはずだ、と決めつけて祈ってもしそうなしなければどうするのでしょうか？ここでは、木によって水が甘くなったことそのものよりも、祈ることによって、思いもよらない形であったけれど、神が困難から助けだしてくださったということが事実として描かれているのです。困難があって祈る時、解決方法までこちらで指定する必要はありません。わたしたちも、神が必ず助けてくださる、と信じて祈るところに祈りの心があります。

そこで、あらためて今日のところをみてみますと不思議なことが語られています。25節から「そのところで主は彼に掟と法を与えられ、またそのところで彼を試みて、言われた。

『もしあなたが、あなたの神、主の声に必ず聞き従い、彼の目にかなう正しいことを行い、彼の命令に耳を傾け、すべての掟を守るならば、わたしがエジプト人に下した病をあなたには下さない。』」わからないことがたくさんある不思議な文章です。なぜ突然掟と法の話がでてきたのでしょうか。また、試みたとありますが、何が起こったのでしょうか。水はすでに甘くなっていたのです。エジプト人に下った病とは何のことでしょう。あの10の災いのうち病気だったのは7番目の腫れ物の災いだけです。ここで突然そんな話をしているのでしょうか。

ひとつには、この時点ではこのこともまた、これからの旅の基本形をあらわすと考えられます。つまり、神の民イスラエルは神の掟と法を神の声、神の命令として聞き、守ることを求められることになる、そのような歩みをするのが神の民です。しかし、神の法と掟、わたしたちのいつもの言葉で律法と言ってよいのですが、それは罰を与えるためにあるわけではありません。たしかに一般的に法というものはそれを犯すと与えられる罰則があります。速度違反をしたなら、交通切符を切られて、免許の減点と罰金をくらはめになります。けれども、神はここでおっしゃるのは与える罰が強調されているわけではありません。

そうではなく、「あなたが法定速度を守るなら、交通違反切符は切らない」ということです。神はここで、いえいつも、罰を与えたいと思っておられるのではありません。ではなぜ法があるのか。人は放っておいたら神から離れ、罪を犯すからです。ブラック校則という、一般常識でも人権理解に照らしても到底おかしい校則が学校にある、ということが最近話題になっています。人の髪の毛の色を指定したり、髪型を強制したり、服装について事細かに色や形を指定するような校則です。これらは、人間を管理するためにあると思われるかもしれません。ひょっとしたら生徒が荒れていた大昔には必要であったかもしれません。しかし、今の日本ではそんなものは必要ないし、教育の深まりを考えるならば、別の方法で生徒を導くことができるはずで、神の律法も、わたしたちの一拳手一投足を監視し、しぼるためにあるのではなく、道を誤らないように、神から離れてしまわないように、そして滅びないようにと神が生き方を教えてくださっているのです。ですから速度の例で言うならば、「法定速度を守れば、事故を起こす可能性が少なくなり、目的地にちゃんと着くことができる。みんな幸いに生きることができる」、ということになると思います。

法定速度をやぶると事故を起こしてしまう。神は事故を起こしてほしくないのです。ところで、11月6日の説教で神から離れてしまうことそのものを罪と呼ぶ、という話をしました。そして神のもとに帰るために必要なことは罪を赦されて義とされることでした。わたしたちはみなかつて神から離れて罪の状態にあったのです。神との関係は罪であり、そこから関係の回復のために義とされることが必要でした。人間は同時に、神との関係が壊れることで、他人との関係も壊れてしまいました。神との関係すなわち神の御心、律法を知らずしては人との関係を正しく保つこともできないからです。ところで、病気というのは本来あるべき健康な姿から離れてしまっていること、と言っていると思います。病気が治ることを回復と言うように、病気が治るとは本来あるべき姿に戻ることです。病気の癒しというのはあるべき姿に戻ることです。主イエスがなされた病の癒やしもこれと同じことです。主イエスがなされたことは、病原体を取り除いて病気になっていた組織を元に戻す、現代の治療を意味するのではなく、神から離れてしまった病の状態にある人を神のみもとに帰すことでした。そしてそこから他人との関係も回復されていきます。病の状態によって人からのけものにされ、本来いるべきところにいられなくなった人は主イエスの癒しによって元のところに戻ることができたのです。主イエスが来られる前、わたしたちはみな罪を犯して本来の姿ではありませんでした。病気の状態です。この病気は癒やされなければなりません。ここで「エジプト人に下した病」、つまりエジプト人は病気になったと言っているわけですが、これはある特定の病気のことでなく、神を信じず離れてしまった罪の中にあることを病気の状態になってしまった、と言っているのです。具体的には10の災いと葦の海で分かれたところから戻った水に飲まれて滅びてしまったことを言いますが、この特定の出来事を超えて、神の法と掟に示される恵みの、まことの生き方から離れてしまうことは病気、つまり人のあるべき姿でなくなってしまう。そのままでは滅びてしまう、とおっしゃっているのです。そして、神はそのようなことは望んでおられ

ません。神は、病気を放っておいたり、罪を放っておいたりして、滅びればよいなどとは考えておられない。「わたしはあなたをいやす主である」とおっしゃいます。これは大きな慰めです。そこで、神は、一時的に小さな池の苦い水を甘い水にかえるだけでなく、水に困らないような大きなオアシスに民を導いてくださったのです。神が癒しの神であることがこの出来事で指し示されているのです。ですから、旅における飲み水が問題なのではありません。

ヨハネによる福音書第4章にサマリア人の女性と主イエスのやりとりが記されています。のどが渴いた主イエスが、サマリア人の女性に「水を飲ませてください」と言ったことから始まった対話で、その中で主イエスは、女性に次のようにおっしゃいます。「この水を飲む者はだれでもまた渴く。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渴かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」これを聞いて女性は言います。「主よ、渴くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください。」主イエスは永遠の命に至る霊的な水のことをおっしゃったのに対して、彼女は、生活のための飲み水のことだと思ったのです。確かに生活が問題です。飲み水は必要です。ですから、水を求めていけないではありません。必要があればモーセと民になさったように、神は水を与えてくださるでしょう。しかしその上で、本当に求めなければならないものがある。いえ、本当に必要なのに求めることを知らないでいるものがあるのです。

この女性は結婚に関して複雑な事情がありました。そのことを言い当てられて、この助成は主イエスを預言者と認めます。この時点でこの女性は生活から、神の方に目を向け始めているのがわかります。癒やしが始まっている。苦い水が甘い水に変わったのです。けれども、主イエスはさらに先を行かれます。「まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。」主イエスの癒しによって、人は礼拝することができるようになります。主イエスの十字架によって罪は赦され、神へと悔い改めて礼拝をする民の一員となるのです。ただ霊と真理をもって神を礼拝し、神の心を愛する者とされる。そこにこそ法と掟、神の律法に喜びのうちに生きる姿が生まれます。神こそが人がそのような礼拝者となることを求めておられるのです。厳しい荒れ野を歩む旅の中で、のどが渴いていても霊と真理をもって神を礼拝する。そこにこそ人の本来あるべき姿、神の恵みの中に生きる幸いがあるのです。

終わりの日の安住の地は約束されています。ここにいるわたしたちはそれまでまだしばらく地上を、荒れ野を歩まなくてはならないようです。困難もあるかもしれません。喉も乾くでしょう。けれども、主の日の礼拝において、この御言葉の礼拝において、わたしたちはまことの癒やしが与えられ、つきることのない御言葉の水をいただいて潤されて歩み続けることができます。